



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4430 号 2018.6.9 発行

30 歳で画才開花!ダウン症の画家・いかわあきこに起きた「奇跡」

ヤフーニュース 2018 年 6 月 8 日

田中幸夫 | 映画監督 (演出・脚本・プロデュース) 風楽創作事務所主宰

アトリエにて/北
川のん撮影

地藏や孔雀



などを題材とした、カラフルアートで知られる画家いかわあきこ(48)。温かさに包まれるような独特の画風が、高く評価されている。しかし彼女はダウン症で、30 歳までは絵を描いたことすらなかった。「奇跡」はどのように起こったのか。

■いかわあきこの描く地藏・孔雀・桜

いかわあきこは 30 歳を過ぎるまで絵を描いたことがなかった。或る日、突然、何かに突き動かされるようにペンを取った。小さなメモ用紙に小さなお地藏さんが現れた。母親の隆子は、大きな紙を与えてみた。あきこは一心不乱に描き始めた。何十、何百のお地藏さんの絵が部屋を埋め尽くしていった。障害のある子をもつ知人は言った。「このお地藏さんは隆子さんだと思うよ。自分をすべて受け入れてくれる母親の姿。あきこちゃんは、あなたの苦労を全部分かっているのよ。」

ダウン症の子の精神世界は驚くほど深いとも言われる。隆子は半信半疑ながら、あきこが絵を描くと、満面の笑みで喜び拍手もした。父の隆夫も加わった。あきこは、両親の喜ぶ姿がただただ嬉しかったに違いない。毎日、朝から晩まで、お地藏さんを描き続けた。

やがて、沢山の人たちに見てもらおうと、小さな展覧会を開いた。すると、思いも掛けない大きな反響が……。カラフルな色彩の中から溢れ出る優しさと温かさが、人々の胸を打った。テレビ局がやって来た。新聞社も押しかけて来た。戸惑う両親の傍らで、あきこは人なつっこい笑顔を見せるだけ。両親は我が子がいきがいを見つけた幸福に浸った。「お地藏さん、一人で淋しそう。」ある日、あきこが呟いた。お地藏さんの絵に、蝶やトンボや鳥や花が加わるようになった。

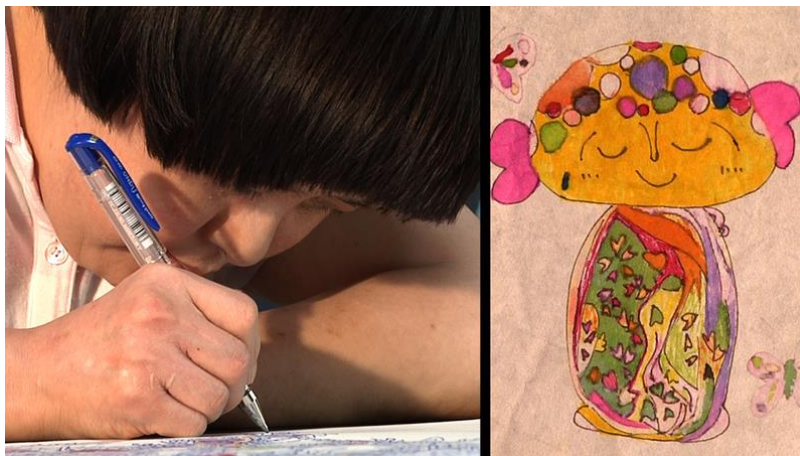
両親はあきこを動物園に連れて行った。白い孔雀が大きな羽根を広げ、あきこを迎えた。その日から、あきこは飽くことなく孔雀を描いた。隆子の知人が、本物の孔雀の羽根をプレゼントした。あきこは泣いた。「早く返して来て!羽根抜いたところから血が出ている。孔雀に早く返してあげて!」隆子は、その取り乱しように驚くとともに「ダウン症の子は染色体が 1 本多い。それは天使の 1 本と呼ばれているのよ。」と友人から慰められた昔を思い出した。

「今、それは真実なのだと素直に思えます。」と微笑む。

左：アトリエにて/北川のん
撮影 右：おじぞうさん/
いかわあきこ作

■赤に白を混ぜたら何色になる？

あきこの絵の特徴は色を混ぜないで描くことだ。赤に白を加えるとピンクになるということが理解できない。だから沢山のマーカーやアクリル絵具がいる。画材屋に行くことは、あきこの大きな楽しみになっている。



もう一つの楽しみは、3時のおやつ。朝から晩まで描き続けるあきこにとって、絵から離れる唯一の時間だ。ケーキより饅頭、コーヒーより紅茶がお好み。

母：居川隆子 父：居川隆夫
愛犬：らら/北川のん撮影

■カラフルアート展を各地で開催

笑顔と勇気を届けるカラフルアート展。父親の隆夫の運転する車で、家族一緒に愛犬ららも連れて、全国各地どこにでも出かける。

ダウン症の書家として世界的にも名高い金澤翔子との二人展が実現した。京都大丸や大阪ビッグアイには大勢の人たちが詰めかけた。

隆子は親の思いを講演会で話すこともある。伝えたいことは、人としての温かさと優しさ、一生懸命さ。それは全て、我が子あきこから学んだことだ。



さくらとお月さまいかわあきこ作

■ダウン症の子を持つ親の思い

いかわあきこのホームページより.....

今日、「ダウン症」「ダウン症児・者」に関する情報がメディアを通じて、日々報道されるようになりました。社会的背景も時代の流れと共に、大きく変わってまいりました。世間の人々に理解を深めていただける状況になりつつありますことを、私たち、障がい者とその家族は、不安を感じながら

景も時代の流れと共に、大きく変わってまいりました。世間の人々に理解を深めていただける状況になりつつありますことを、私たち、障がい者とその家族は、不安を感じながら

も期待しております。

我が子、晶子が誕生の時代（1970年頃）は、「家族・親族」、ましてや「世間さま」に「恥ずかしい子」との思いが強く、暗い日々を過ごしておりました。そのような状況の中で、翻弄されたことも多々ありましたが、ゆっくり、ゆっくり、成長してまいりました。何気ない日々の中で、「なんて清らかなところ」「なんて優しいところ」と癒してくれる存在になっていました。それからの日々は、胸を張って、外出できるようになり、その日一日楽しければ…。その日一日微笑みあえたら…。

親なら当然、こんなことが出来る子に、あんなことが出来る子にと、子供の将来に夢をもち、目標に向かって、叱咤激励の日々を送ることでしょう。

しかし、私は、ただただ晶子の気持ちに寄り添って過ごすことしか出来ませんでした。養護（支援）学校卒業後、作業所等に通わせていただきましたが、いつの頃からか、自宅で絵を描くようになりました。最初の頃は、「おじぞうさま」と小さな鳥やお花を描いておりました。動物園、植物園、花鳥園、お花畑…など、晶子が興味を示す場所に出かけ、親子共々、楽しい時間を過ごしております。その折々に感動したことが晶子のところにいつまでも映っているようです。

朝から夜遅く迄、「この鳥しあわせかな…」「この花しあわせかな…」とささやきながら、描いております。

ゆっくり、ゆっくり、穏やかな時間が流れています。温かく見守っていただきました多くの人たちに感謝しつつ、いつまでも、このしあわせな日々が続くことを願っています。（居川隆子）

*いかわあきこ（居川晶子）略歴

1970 京都府宇治市に生まれる

1988 京都教育大学付属養護学校高等部卒業

1993 京都市洛西の里授産園退園

2007 みんなしあわせ展（大阪）に展示 NHK テレビで放映

2012 第27回パリ国際サロン出品 二元会新人賞

2015 東久邇宮記念賞

2016 大丸京都店 展示

*いかわあきこ作品集 「あきこの四季 いかわあきこ」（サンエムカラー発行）

*個展の予定 （期間）8月1日～20日 9:30～17:30 休館日なし

（会場）木口記念会館 兵庫県芦屋市呉川町14-10 Tel 0797-35-5262

<ひきこもり>平均年齢34.4歳、高齢化深刻に

毎日新聞 2018年6月8日



ひきこもった当時の心境などを語る当事者＝高知市内で、2018年5月22日、井上大作撮影

ひきこもりの高齢化が深刻になっている。支援団体の「KHJ全国ひきこもり家族会連合会」による昨年度の全国調査では、ひきこもりの平均年齢は34.4歳に達し、10年前に比べて4歳以上も高くなった。連合会の高知県支部には当事者のいる約80家族が参加しているが、外に出てこられる当事者は数人ほどという。長年、ひきこもる息子と暮らす母親は「私が死ん

だらこの子の生活はどうなるのか」と悩みは深い。【井上大作】

県支部は2006年に設立された「やいろ鳥の会」（高知市）。当事者が自由に過ごす居場所を同市内の一軒家に設け、親向けの講座も定期的を開いている。

ひきこもった経験を持つ当事者の男性2人が心境を語ってくれた。

30代半ばのAさんは中学時代に始まったいじめが原因で不登校になった。通信制の高校を9年かけて卒業したが、対人恐怖のため、進学した介護専門学校を中退。「職業訓練にも通ったけれど、人のことを常に気にして疲れてしまった」と言い、自宅にひきこもるようになった。

転機は母親が見つけた小さな新聞記事だった。10年ほど前、県のひきこもり支援の集いに初めて参加。最初は2週間に1回、数時間ほどの外出だったが、次第に長くなった。当事者の会では失恋も経験し、「それまでの人生は消極的だったが、いろいろなことに挑戦したくなった。今思うと、外に出るきっかけが大切だった」と振り返る。

一方、20代後半のBさんは就職先の長時間労働が引き金で1年間自宅にひきこもった。心身とも調子を崩し、今も気分がむらがあるという。それでもアルバイトに出ることもあり、「今の状態は半ひきこもり。働き方の受け皿がもっと多様になってほしい」と訴える。

◇家族連が相談受け付け

やいろ鳥の会の山本美香さん(73)は「20年、30年とひきこもる人は少なくなく、会の行事などに出てこられる当事者は全体の1割に満たない」。ほとんどの場合、不安を感じた家族が連絡を取ってくるという。

山本さん自身、20年間ひきこもった長男と同居しており、6年前に入会した。「同じ苦労をしている人と出会い、悩んでいるのは私だけじゃないと分かった」と話す。

全国連合会の昨年度調査によると、ひきこもっている当事者のいる家族の平均年齢は64・5歳。過去最高となり、今後場合によっては介護が必要となる家族が増える可能性がある。また、当事者の年齢は全体の29・2%が40歳以上で、40歳以上では平均20年近くひきこもっていた。

今年3月には、ひきこもりの長期高年齢化に対する声明文を発表。年金世代の80代の親が、無職でひきこもる50代の子の面倒を見る「8050問題」などの実情把握を訴え、問題解決のためには居場所の設置や家族会の存在、訪問支援が重要としている。

やいろ鳥の会(090・3184・8109)は相談を受け付けている。坂本勲会長(65)は「当事者は家族の中で孤立し、家族は社会の中で孤立してしまう。当事者には自分を責めないでいいよ、一緒に生きていこうよと伝えたい。親も自分たちだけで悩まないでほしい。ひきこもりは子育てや家庭の問題ではなく、社会全体の問題だと知ってほしい」と訴える。

林文科相 カンヌ最高賞で祝意を 是枝監督は辞退表明 毎日新聞 2018年6月8日
第71回カンヌ国際映画祭の授賞式の後、記者会見でパルムドールの記念の盾を前に語る是枝裕和監督=フランス・カンヌで2018年5月19日、小林祥晃撮影



フランスで先月開かれた第71回カンヌ国際映画祭で、メガホンを取った「万引き家族」が最高賞「パルムドール」を受賞した是枝裕和監督に対し、林芳正文部科学相が文科省に招いて祝意を伝える考えを示したところ、是枝監督が自身のホームページ(HP)に「公権力とは潔く距離を保つ」と記して辞退を表明した。

林氏は7日の参院文教科学委員会で、立憲民主党の神本美恵子氏から「政府は是枝監督を祝福しないのか」と質問され、「パルムドールを受賞したことは誠に喜ばしく誇らしい。(文科省に)来てもらえるか分からないが、是枝監督への呼びかけを私からしたい」と述べた。今回の受賞を巡っては、仏紙「フィガロ」が安倍晋三首相から祝意が伝えられないことを「是枝監督が政治を批判してきたからだ」と報じていた。

答弁を受け、是枝監督は同日、HPに「『祝意』に関して」と題した文章を掲載。今回の

受賞を顕彰したいという自治体などからの申し出を全て断っている」と明かした上で「映画がかつて『国益』や『国策』と一体化し、大きな不幸を招いた過去の反省に立つならば、公権力とは深く距離を保つというのが正しい振る舞いなのではないか」とつぶった。【伊澤拓也】

旧優生保護法 強制不妊手術 真相究明を 障害者3人体験談 出産に反対／説明なく注射 富山で勉強会 /富山

毎日新聞 2018年6月8日

旧優生保護法下で強制不妊手術が繰り返された問題で、障害者の自立支援活動を行うNPO法人「文福」（富山市五福、八木勝自理事長）は連続学習会「障害者の立場から『強制不妊手術』を考える－優生思想を軸に」をスタートした。5月にあった初回は、障害を理由に子宮摘出や中絶手術を勧められた3人の障害者が体験を語り、真相究明を訴えた。【青山郁子】

■福田文恵さん（57）＝富山市、文福副理事長

生後間もなく脳性マヒを患い、小中高は養護学校に通った。中学時代、看護師に「生理の始末はできるのか」と不妊手術を受けるよう強要された。親が主治医に相談すると、体力的に手術は無理との診断で、始末できるよう訓練した。高校生で初潮を迎えてうれしかったのに「おめでとう」を言ってくれたのは主治医だけ。看護師には「喜んでいる場合ではない」と言われた。

40代前半で子宮内膜症になり、女性医師から卵巣も子宮も全摘出するよう言われたが、セカンドオピニオンで子宮に異常はなく、手術を免れた。「日本社会はまだまだ障害者を受け入れていない」。

■中村薫さん（60）＝富山市

8歳から他県の障害者施設で暮らし、10代で初潮を迎えた。女性職員から「どうせ子どもなんて産めない」と繰り返し言われ、22歳の時、子宮摘出手術を受けることを自ら決断。その後、障害があっても出産や育児を経験した人がいることを知り、後悔の念にさいなまれることになった。

旧優生保護法の問題がクローズアップされてから、取材を積極的に受けているが、心ない言葉を受けるようにもなり、「今は何も言いたくない」。

■河上千鶴子さん（65）＝富山市

3回妊娠した。最初は24歳。妊娠が分かると、産婦人科医が何の説明もなく注射を打とうとした。怖くなり逃げ帰ったが、親きょうだいも交際相手も出産に反対。県内での出産を諦め県外に移ったが、流産。自殺まで思い詰めた。

その後、夫の四十物（あいもの）和雄さん（66）と出会い、2度目の妊娠。帝王切開の必要から大きな病院を紹介されたが、再び注射を打たれそうに。ちょうど別のお産が始まり、その間に逃げ帰った。その子は36歳になった。

最後の時も医師に「中絶するなら早いほうがいい」と言われた。普通は妊娠すると「おめでとう」と言われるのに、1回も言われなかった。障害者は子どもを産む存在ではないと思われていたから。脳性マヒは旧優生保護法の対象外だったが、健常者にとっては私たちも対象という考えがあったはずだ。

◇

次回は7月13日午後7時から文福事務所。「障害者の立場から問題を明らかにする」とのテーマで、不妊手術の影響や障害者の性的自己決定権と支援体制などについて考える。3回目は11月10日、富山市安住町の県総合福祉会館サンシップとやま（時間未定）。立命館大生存学研究センターの利光恵子・客員研究員の講演「優生思想と現代（仮）」。詳細は同事務所（076・441・6106）。

新・呉東呉西 「なぜ女性記者が来てくれないのかと思った」… /富山

毎日新聞 2018年6月8日

「なぜ女性記者が来てくれないのかと思った」。旧優生保護法の強制不妊手術問題について富山市のNPO法人が開催した勉強会で、マスコミの男性記者から取材を受けた障害者女性3人が口をそろえた。3人の脳性マヒ障害は法律の対象外だが、全員、初潮や妊娠を機に子宮の摘出手術や中絶を勧められたという▼言われてみれば、私だって、若い男性に生理の話をするのは抵抗がある。取材する方は何も思っていないくても、取材される側としては「女性記者に来てほしい」とも言えず、嫌な思いをしたかもしれないと感じた▼取材を受け、新聞に掲載されたことで、心ない言葉を言われ、「今は何も言いたくない」という女性もいた。女性の障害者であるが故につらい思いを味わったのに、その後も追い打ちをかけるようなことがあってはならない。取材する側として改めて肝に銘じた。【青山郁子】

マイナンバーカード5万4千人引き取らず 道内12市 メリット感じず不要と判断 製造1枚千円、廃棄する自治体も

北海道新聞 2018年6月7日

人口上位12市のマイナンバーカードの交付状況と、主な住民サービスの有無

	発行数	役所での保管数	コンビニでの証明書発行	児童手当の電子申請	保育施設利用の電子申請
札幌	22万2431	3万7638	○	○	○
旭川	3万1737	4412	×	○	×
函館	2万6002	2339	×	×	×
苫小牧	2万1523	2429	○	○	×
釧路	1万8442	1370	×	×	×
帯広	1万5780	1153	×	○	○
江別	1万1960	1726	○	×	×
北見	1万2924	430	×	×	×
小樽	1万2603	602	×	×	×
千歳	1万3383	1316	○	○	○
室蘭	1万586	366	×	○	×
岩見沢	9060	617	○	×	×
計	40万6431	5万4398			

身分証明書の機能を持つマイナンバーカードを巡り、交付を申請した人が受け取りに来ないため、自治体が保管している未受領カードが4月末現在、道内の人口上位12市で計約5万4千枚に上ることが北海道新聞の集計で分かった。「カード交付は義務」と思って申請した住民がその後、メリットを感じずに不要と判断、受け取りに行かない例が多いとみられる。未受領カードの大量発生は全国的な問題となっており、道内でも廃棄する自治体が現れている。

カードは地方自治体が出資する地方公共団体情報システム機構（東京）が2016年1月から発行。役所で本人確認をして受け渡す。申請は任意で、

初回は無料で発行される。

道内も保管数が増えており、北海道新聞が人口上位12市に尋ねたところ、カードの発行は4月末までに計約40万枚。受け渡し済みは計約35万枚で、計約5万4千枚が保管中だ。

地方公共団体情報システム機構によると、カードの製造原価は1枚千円で、大量廃棄によって数千万円分が無駄になる可能性もある。マイナンバー制度に詳しい札幌大の上机（かみつくえ）美穂教授（民法）は「カードの浸透度はあまりに低く、メリットもデメリットも国民に見えづらいのが現状。何百億円もかけて導入した以上、費用対効果などを一度国民に分かりやすく説明すべきだ」と指摘する。

地域運営学校5432校に 努力義務化で大幅増 産経新聞 2018年6月8日

地域住民や保護者が学校運営に参加できる「コミュニティースクール」（地域運営学校）に全国の教育委員会が指定した公立小中高校などは4月1日時点で5432校となり、平成29年の3600校から大幅に増加したことが8日、文部科学省の調査で分かった。全国の公立学校に占める割合は14.7%となった。

地域運営学校は地域で支える学校づくりを目的に、16年に地方教育行政法を改正して創設。年々増え続けていたが、29年3月に、全国の教委にコミュニティースクールの設置が努力義務化されたことが今回の大幅増につながった。

学校種別では、小学校3265校▽中学校1492校▽高校382校▽幼稚園147園▽特別支援学校106校▽義務教育学校39校▽中等教育学校1校。

特に昨年65校だった高校は5倍以上となり増加が著しかった。熊本県では公立高校など全ての県立学校を指定し、熊本地震の教訓を生かした防災の取り組みを学校と地域が一体となって進めているという。

「どまんなか」で認知症予防？コメに多くの成分 山形 NHK ニュース 2018年6月8日



かつて「はえぬき」と並ぶ県産米の主力品種だった「どまんなか」に、認知症の予防効果が期待される成分が多く含まれていることが、山形大学と県の研究でわかりました。

山形大学の発表によりますと、農学部の渡辺昌規准教授と県水田農業試験場の研究グループは、「コシヒカリ」な

ど全国の主な品種と県の品種、合わせて17について、認知症の予防効果があるとされる「フィチン酸」と呼ばれる成分がどの程度含まれているか調べました。

その結果、「どまんなか」が最も多い4%余りで「コシヒカリ」の1.3倍でした。

フィチン酸は米ぬかに多く含まれ、アルツハイマー型認知症に予防効果があるという研究データが発表されています。

山形大学は県内企業と共同で、米ぬかから効率的に抽出する方法をすでに開発し、今後、サプリメントとして商品化することも検討しています。

渡辺准教授は「ブランド米の競争がある中で、機能性の部分で付加価値をつけることができる。栄養補助食品の開発など6次産業化につなげたい」と話していました。

「どまんなか」は山間部の栽培に適したコメとして県が開発した品種で、平成3年に「はえぬき」とともにデビューしましたが、その2年後の冷害で大きな被害を受けたことなどから、現在の作付面積は県産米全体の0.5%にとどまっています。

共同研究を行った県は「どまんなか」の再評価につながると期待しています。

県農業総合研究センターの土地利用型作物部の中場勝部長は「『どまんなか』はもともと味のよい品種なので、また脚光を浴びるようにPRしていきたい」と話していました。



大阪) 北急の新駅名案は「箕面萱野」「箕面船場阪大前」

北大阪急行を千里中央駅(豊中市)から北へ約2・5キロ延伸する事業で、新設される2駅の駅名を公募していた大阪府箕面市は5日、北側の終点駅が「箕面萱野(かやの)」、南側の中間駅が「箕面船場阪大前」と駅名案が決まったと発表した。営業主体の北大阪急行が国に届け出をしてから、正式に決まる。

市が昨年12月～今年1月に市民らから募り、1435件の応募があった。駅周辺の12自治会や大阪大、北大阪急行などで行く駅名検討会議で、駅名案を話し合った。箕面と地元の地名を合わせ、これから大阪大の箕面キャンパスが移転して地区の拠点になると見込まれる中間駅は「阪大前」を加えることにした。

朝日新聞 2018年6月8日



市鉄道延伸室の担当者は「終点駅は、地元で親しまれている萱野の名が入った。中間駅は阪大前と入ってインパクトがあり、利用者にも分かりやすい」と話す。延伸事業は昨年1月に着工し、2020年度の開業をめざす。(永井啓吾)

短歌 天神橋筋、人情100首 大阪の歌人、5年がかり 店ごとに魅力

毎日新聞 2018年6月6日



天神橋筋商店街に立つ高田ほのかさん＝大阪市北区で、花澤茂人撮影

「日本一長い商店街」天神橋筋商店街（大阪市北区）の魅力発信しようと、歌人の高田ほのかさん（36）＝大阪府大東市＝が店ごとのこだわりや思いを詠んだ短歌100首を作った。2013年から約5年かけて店主らの話を聞き取り、31字に詰め込んだ。ポスターや冊子にまとめ各店にプレゼントする予定で、高田さんは「商店街に息づく人のつながりの温かさを再認識してもらうきっかけになれば」と願う。【花澤茂人】

天神橋筋商店街は、全長約2・6キロに約600店舗が軒を連ねる。高田さんは03～04年、商店街と縁の深い大阪天満宮や商店街の行事、イベント

で活動する「天神天満花娘」を務め、店主らにねぎらわれたことから「いつか恩返しを」と思っていた。商店連合会長を務め2年前に亡くなった土居年樹さんと話した際、「かつては買う物が無くてもお客さんが出入りしコミュニケーションがあったが、最近はそうした魅力が失われつつある」と嘆いていたことをヒントに、店ごとに短歌を作ることを思いついた。

気になる店を見つけたら「話を聞かせてください」と飛び入りで依頼。不審がられることもあったが、「聞いてくれてありがとう」と喜ばれるとやりがいを感じた。

梅鉢が優しく溶ける 目をとじて六代目の世界に遊ぶ
天神橋筋商店街（大阪市北区）

創業約150年の和菓子店「御菓子司 薫々堂」の代表的な菓子「梅鉢」を口に詠んだ1首。舌の上で溶ける感触を楽しみながら、6代目店主・林喜久さん（53）の笑顔を思い浮かべた。

コーヒーは添えものでいい 常客の時間を香りではうっと止める

コーヒー専門店「浪漫屋」の店主・守本芳郎さん（65）にこだわりを聞いた際、「お客さんはコーヒーそのものよりもほっと一息つける時間を求めている」と言われ、思いやりの深さに感動し浮かんだ1首だ。

番外の101首目には商店街全体をテーマに「人情」を表現。

左右から響く“らっしゃい！”に包まれて まっすぐ歩む二・六キロ

天神橋三丁目商店街振興組合の築部健二理事長（68）は「親身になってお客さんと向き合う商店街の良さを短歌でしみじみと思い出してもらえるのでは」と期待する。

来月展示も

100首のポスターは7月に大阪市立中央図書館（西区）、8月に大阪天満宮参集殿などで展示する。8月4日には天満宮で対談イベントもある。問い合わせは高田さん（090・3822・9616）。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

